〔1230〕

氏名（生年月日）	西　出　佳詩子（ニシ デ ヨシコ）　（1981年7月20日）
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 番 号	文博甲第115号
学位授与の日付	2017年3月16日
学位授与の要件	中央大学学位規則第4条第1項
学 位 論 文 題 目	**ドイツ語テクストの読みの諸相** **―日本語を母語とするドイツ語学習者とドイツ語母語話者を対象とした調査から―**
論 文 審 査 委 員	主査　林　明子 副査　縄田　雄二・シュミット、マリア　ガブリエラ（筑波大学）

内容の要旨及び審査の結果の要旨

1　論文の構成

本論文は，日本語を母語とするドイツ語学習者およびドイツ語母語話者を対象として，読みのプロセスを調査・分析した実証的な研究である．同時に，ドイツ語学習における読解指導や教材開発にむけての基礎資料を提供する意義を持つ．構成は以下の通りである．

1. 研究目的
2. 先行研究と本研究の位置づけ
    - 2.1 読解の理論的モデルの変遷
    - 2.2 外国語・母語としての読みの研究
        - 2.2.1 日本におけるドイツ語学・ドイツ語教育において
        - 2.2.2 他の外国語教育における文章理解研究（英語教育の場合）
        - 2.2.3 他の外国語教育における文章理解研究（日本語教育の場合）
        - 2.2.4 母語としてのドイツ語教育における読み
    - 2.3 読みにおける要約の役割
    - 2.4 テクストのマクロ構造
3. 調査
    - 3.1 調査の種類と調査協力者
    - 3.2 調査の手順と方法
    - 3.3 テクストの構造を明示化する要素の有無と調査手順の関わり
    - 3.4 分析の観点

4. 【調査Ⅰ】（構造を明示化する要素を含むテクストⅠ使用）分析の結果と考察
4.1 調査に用いたテクストⅠの構造分析
4.1.1 テクスト内容の概略
4.1.2 テクストの結束性を支える手段（ミクロ）
4.1.3 テクスト全体の流れとテクストの展開（マクロ）
4.1.4 テクストⅠと要約文の内容的な対応を認定する方法
4.1.5 回答分析の手順と枠組み
4.2 回答の分析〔学習者の場合〕
4.2.1 マクロ命題の選択
4.2.2 テクスト全体の構造把握の諸特徴
4.2.3 テクストの結束性（ミクロ）の把握
4.2.4 まとめ－学習者とテクストⅠとの関わり－
4.3 回答の分析〔母語話者の場合〕
4.3.1 マクロ命題の選択
4.3.2 テクスト全体の構造把握の諸特徴
4.3.3 テクストの結束性（ミクロ）の把握
4.3.4 まとめ－ドイツ語母語話者とテクストⅠとの関わり－
5. 【調査Ⅱ】（構造を明示化する要素を含まないテクストⅡ使用）分析の結果と考察
5.1 調査に用いたテクストⅡの構造分析
5.1.1 テクスト内容の概略
5.1.2 テクストの結束性を支える手段（ミクロ）
5.1.3 テクスト全体の流れとテクストの展開（マクロ）
5.1.4 回答分析の手順と枠組み
5.2 回答の分析〔学習者の場合〕
5.2.1 タイトルと出典からの内容推測
5.2.2 マクロ命題の選択
5.2.3 テクスト全体の構造把握の諸特徴
5.2.4 テクストの結束性（ミクロ）の把握
5.2.5 まとめ－学習者とテクストⅡとの関わり－
5.3 回答の分析〔母語話者の場合〕
5.3.1 タイトルと出典からの内容推測
5.3.2 マクロ命題の選択
5.3.3 テクスト全体の構造把握の諸特徴
5.3.4 テクストの結束性（ミクロ）の把握
5.3.5 まとめ－ドイツ語母語話者とテクストⅡとの関わり－

6. 総括と展望

巻末資料
参考文献
ドイツ語要旨

2　論文の要旨

本論文は，6 章からなる．

1 章は，本研究の目的，研究史の中での位置づけ，調査の対象と方法，分析と考察のポイント，本研究の意義と発展の可能性（学界への貢献のあり方）を概観する．ドイツ語で書かれたテクストの構造や論理展開を把握するために，日本語を母語とするドイツ語学習者とドイツ語母語話者がテクストとどうかかわるのかを，テクストの要約文作成という課題を通して明らかにするのが，本研究の目的である．要約という作業には，マクロ命題の読み取りと同時に，語や文の相互関係というミクロレベルの言語的指標の理解も欠かせない．そこで，調査協力者（学習者と母語話者）にマクロとミクロの両側面からの課題を課した．調査に協力した学習者はドイツ語を第一外国語として学ぶ大学生である．大学という高等教育機関におけるドイツ語教育も視野に入れた研究であると，位置づけられている．

2 章では，読みに関わる先行研究と本研究の関わりが，(1) 読解の理論的なモデルの変遷，(2) 外国語学習者および母語話者の読みの研究，(3) テクストの構造分析，(4) 読みにおける要約，の 4 つの観点から述べられている．まず読解の理論的なモデルとして，ボトムアップ処理(Gough 1972 など)，トップダウン処理（Goodman 1967，Smith 1982 など），相互作用モデル（Rumelhart 1977，Carrell 1983 など）の 3 つの変遷に言及した上で，本研究における調査に直接関わる外国語学習者および母語話者の読みの研究へと論が展開される．日本におけるドイツ語学・ドイツ語教育分野の先行研究（Ide 2005，2008，太田 2004 など）を挙げて研究史を概観し，本研究との関係を述べている．西出氏は，テクストの展開を追い，全体を見通すことができる読みの必要性自体は，以前から議論されてきたが，テクスト全体を把握する場合に，読み手がどのような処理をしているかという議論が十分でなかったことを指摘している．それを受けて，本研究をドイツ語学習者とドイツ語母語話者の 2 グループの比較を通して，読み手がテクストの全体的な内容把握にどう関わっているのかを明らかにするものと位置づけている．調査に先立ち，調査用テクストを分析するが，その全体構造の分析については，van Dijk （1980）を参考にしたこと，また，要約文が読みを観察する有効な手段として活用されていることを，佐久間（1985，1989 など），卯城（2009）や舘岡（1996）などを示しながら述べている．

3 章では，調査に向けての手続き，すなわち (1) 調査の種類と調査協力者，(2) 調査の手順と

方法，（3）調査に用いるドイツ語テクストの違いと調査手順の関わり，（4）分析の観点が，簡潔に述べられている．それによれば，調査Ⅰと調査Ⅱでは，異なるタイプのテクストが用いられた．調査Ⅰのテクスト（31 文，363 語）には，テクストの構造を明示化する要素（タイトルやリード文，小見出しなど）が含まれる．重要度判定という課題を課して，原文のどの情報が重要かを考えるよう促してから，要約文（日本語の場合：300 字以内，ドイツ語の場合：110〜150 語）を作成させた．一方，調査Ⅱのテクスト（13 文，245 語）には，構造を明示化する要素が含まれない．タイトルと出典から，テクストの内容や形式に関連する事柄を推測させたのちに，要約文（日本語の場合：200〜250 字，ドイツ語の場合：70〜100 語）を作成させた．分析は，マクロ構造の中のどの階層レベルの情報を選択したのかというテクスト全体の展開に関わる分析と，テクストの結束性を支える言語的指標に注目したミクロレベルの分析の両側面からなること，その後，学習者と母語話者の分析結果の比較を行ったことが説明されている．

4 章と 5 章は，本論文の中心部ともいえる調査ⅠおよびⅡの分析の結果と考察である．どちらとも（1）調査に用いたテクストの構造分析，（2）学習者の回答，（3）母語話者の回答の 3 本の柱を立てて記述されている．両調査とも，調査協力者の回答分析に先立って，テクストの構造の分析を行っている．ミクロの言語的指標については，先行研究（たとえば，Brinker 2005，Helbig und Buscha 1993，Heinemann und Viehweger 1991，稲葉 2010 など）を参考にしながら，再録，接続表現，省略，時制，法，イソトピーを分析項目としてたてている．また，要約文の分析に先立ち，佐久間（1997），門田・野呂（2001）などドイツ語以外の言語を対象とした研究を援用して，ドイツ語の分析に適用できるような修正を加えている．

4 章では，調査Ⅰ（構造を明示化する要素を含むテクストを使用）の結果が，個々の要約文の詳細な分析とともに示されている．学習者，母語話者ともに，小見出しが読み手にとって重要な指標になっていること，学習者は小見出しが関わるマクロ命題を多く見出すことができた反面，母語話者とは異なり，マクロ命題の選択には偏りがみられたことが指摘されている．さらに，母語話者の場合，要約文作成にあたっても，テクストとの間に距離を置き，全体を俯瞰しながら展開を追うなど，テクストから得た情報を再構築している姿勢が明らかになったと述べている．言語的指標については，再録，接続表現，省略，時制，法の 5 点についての分析結果が示されている．言語的指標に起因する読み誤りの例は学習者に観察されるが（代用形による再録など），接続表現に関しては，いずれも文頭に位置していて目につきやすく，文間の階層性をとらえる上で有効な指標となっていたことが推測されると指摘としている．

5 章は，調査Ⅱ（構造を明示化する要素を含まないテクストを使用）の分析結果をまとめたものである．学習者にも，マクロ命題を見出そうとする姿勢は観察されたものの，実際に要約文に盛り込まれたマクロ命題の数はさまざまであったこと，マクロ命題を多く見出せた学習者とそうでない学習者の違いは，本文全体に関わる重要な情報を見出せるか，テクストの構造把握が部分的で，情報としては下位に位置する補足的なものしか読み取れなかったかにあったことが指摘されている．

母語話者については，要約文に盛り込まれたマクロ命題の数に大きな差はなかったこと，テクスト全体に関わる重要な主張を含むマクロ命題を押さえた上で，下位の情報にも目を配り，テクストの全体的な構造をとらえていたことが述べられている．ミクロの構造に関しては，再録，イソトピー，時制，法が取り上げられている．学習者の場合，調査Ｉと異なり代用形による再録については，ほぼ全てが指示対象を特定していたという結果を得た．その他，イソトピーについて，意味的なつながりを内容理解につなげていくことができず，結果的に原文とは大きく異なる要約文が作成された例などが紹介されている．

6 章は，本研究で得た成果の総括である．

(1) 小見出しのように構造を明示化する手がかりは，実際の読みのプロセスで重要な役割を果たしていた．学習者，母語話者ともにマクロ命題を見出そうとする姿勢がみられたが，学習者の場合には，マクロ命題の選び方には偏りがあった．特定のマクロ命題がとれたからといって，必ずしもテクストを全体的に把握できたとは言えない結果であった．

(2) 学習者と母語話者の双方が注目したのは，他者の意見や見解を示す言語標識であった．学習者は情報の階層性を示す接続表現にも注目し，印を付けるなどして読んでいた．同時に，学習者の回答の中には，結束性を支える言語的指標の理解が不十分であったことで，原文のマクロ命題の抜き出しやテクストの全体構造の把握に支障が生じたケースもあった．

(3) 母語話者と学習者の間で構造把握や言語的指標のとらえ方には相違がみられた．母語話者は，テクスト全体を俯瞰しながら内容の推移をメタ的なレベルから把握していた．合わせて，原文筆者の文章構成の仕方に言及し，要約対象のテクストとの間に距離を置こうとする姿勢も観察された．換言すれば，母語話者による要約文は，テクスト全体を俯瞰しながら，テクストから得た情報を再構築したものであったが，それは学習者の要約文にはなかった特徴である．

西出氏は，調査を通して明らかになった以上のような読みの特徴は，単に学習者のドイツ語能力にのみ起因するのではないとして，さらに考察を深めている．そして，それぞれの言語がもつスキーマによってテクストの読み方が異なること，母語としてのドイツ語教育と日本の国語科教育における読みの指導法の違いなどが関与した可能性についても触れながら，総括している．

本研究の成果は，ドイツ語教育に対しても，基礎データの提供という形で貢献するものと位置づけられる．ドイツ語読解教材の開発，専門教育を見据えた読解指導などのために拡大・発展させていくことを，今後の課題としながら，論文を終えている．

3　本論文への評価

本論文は，「読み」という行為を，ダイナミックなプロセスととらえ，個々の読み手のテクストへの関わり方に注目している．まず論文冒頭で，Stiefenhöfer (1995) を援用しながら，「読み」を情報に対し読み手が既有知識を使いながら内容理解を進めていくことと定義している．ドイツ語

を学ぶ大学生（CEFR，B1 レベルの学習者）が，実際にどのようにテクストと関わったのかを要約文を用いた調査・分析によって実証的に明らかにし，要因が多岐にわたるため観察・分析が難しい「読み」という言語行動の一端を，ドイツ語母語話者との比較を通して示したものである．理論研究と教育現場の狭間で，その重要性自身も見過ごされがちなテーマを積極的に取り上げた実学的な性格を併せ持つ論文であり，その意義は，テーマ設定という点からも高く評価される．

学習者と母語話者の双方を対象として，同じ条件で，独自の調査を実施した実証的な研究である点も，本研究の長所と言えよう．調査協力者は，日本語を母語とするドイツ語学習者（計 43 人），ドイツ語母語話者（計 50 人）で，調査用テクスト 2 種を用いた調査を実施している．手法としては，調査結果を協力者ごとに個別に分析する質的研究である．但し，調査協力者（学習者）の選定にあたっては，ドイツ語の読みに関するレベルに学習者間で有意差が無いことを統計的な手法によって確認するなど，調査に至る手続きも手堅い．学習者のドイツ語のレベルは B1 であったが，マクロ命題にも気づけるようになる時期であり，大学でドイツ語を専門として学ぶ学生の中で占める割合を考えても，妥当な設定と言える．調査協力者には，課題と要約文を課しているが，読みの過程で何に注目し，何をどう読み取った（あるいは読み誤ったのか）を，母語話者の読みの分析結果と比較しながら明らかにしている．調査結果は，（1）読み手はテクストの構造を把握するにあたって，どのようにテクストに関わろうとしたのか，（2）読み手は内容理解の際にどのような言語的指標をとらえているのか，（3）母語話者と学習者の構造把握や言語的指標のとらえ方に違いがあるのか，あるとすればどのような違いなのか，の 3 点から分析されている．正誤判断ではなく，「読みのプロセス」という可視化しにくい言語行為に迫る工夫が，論文の随所にみられ，研究方法も適切であったと判断される．

論文構成は，言語学分野の実証研究に求められる基準を十分に満たしていた．効果的に挿入された図表も，文章による記述を補い，読みやすさに貢献しており，論理展開は明解であった．出典表記の漏れなどの不備はみられない．西出氏は，ドイツ語教育のみに留まらず，日本の高等教育機関における外国語教育学（英語教育・日本語教育分野）の研究成果を広く視野に入れた上で，要約文作成という作業を選択し，読みの過程の一端を明らかにすることに成功している．学界・教育界の状況を見据えた上で，隣接分野の先行研究にも十分目配りし，調査および分析の方法を検討した成果である．

論文の完成に至るまで，西出氏は，調査協力者による課題回答と要約文作成という言わば「生のデータ」を収集し，扱っている．分析前の下作業に始まり，調査用テクストの分析，テクスト中のユニットの要約文中残存の認定とその記録などの回答の分析，フォローアップ・インタビューなどの補助的資料の確認など，全てのデータを細かく詳細に分析している．データに対して誠実に向き合う態度，正確で細かい作業のくり返しに求められる忍耐力，そうした研究姿勢に支えられる手堅い分析である．データの取り扱いに関して，論文中，調査記録や分析結果は番号やイニシャルにより，調査協力者個人が特定されない形で記載されていた．また，個人情報は分析記録とは隔離して扱い西出氏以外が閲覧することの無いよう管理されていた．

本論文の独自性と意義は，(1) テクストの「読み」を，読み手がテクストの情報と既有知識を結びつけながら，テクストに積極的に関わっていく行為ととらえ，そのダイナミックなプロセスに焦点を当てたこと，(2) 個々の読み手のドイツ語テクストへの関わり方を，マクロ命題の選択と要約文の作成という作業を通して明らかにした実証研究であること，(3) 日本語を母語とするドイツ語学習者とドイツ語母語話者の共通点・相違点を明らかにしたこと，(4) 研究成果のドイツ語教育への応用の可能性を示したことにある．また，日本の高等教育機関における外国語教育（ドイツ語教育・英語教育・日本語教育分野）を支える言語学分野・言語教育学分野の研究に広く目を向け，その成果を積極的にとり入れている．近年，ドイツ語教育に新しい風を吹き込むべく進められている基礎研究の一翼を担うものと考える．

4　本論文の課題と発展性

本論文は，前述のように多くの意義を持つものであるが，課題がないわけではない．西出氏自身も「今後の課題」として記しているように，今回の調査のみでは，一般的な傾向を示すには至らない．今後，本研究で得た知見をもとにデータ数を増やす必要がある．その際，学習者のドイツ語習熟度，学習歴，調査に用いるテクストの種類，さらには学習者の母語における読みの様相など，発展の方向は多岐に渡る．

データ数を増やすのみでなく，調査方法についても更に検討を加える必要がある．たとえば，本論文では，テクストにジャーナリスティックな文章を用いて調査を実施した．使用したテクストのどちらも「外国語としてのドイツ語教育」用に教材化されたものではない．そのこと自体は，望ましいことであり，調査協力者である学習者のレベル（B1）を配慮したテクスト選定も優れている．同時に，加工されていないテクストであるための難しさも含むこととなった．テクストには文法的に「ゆれている」表現や即席造語も含まれており，西出氏は，teaching grammar の立場から，誤植として注をつけるという処理を行った．今回の調査目的および協力者に鑑みての判断であったと言えるが，それが則ち西出氏自身が規範文法の立場を取ることは意味しない．最終試験において，研究者としての立ち位置を問われた際，それを十分明確に伝えるには至らなかった．

論文中，もう少し丁寧な記述が必要な箇所が含まれていたことについても，今後の改善点である．具体的には，接続詞の分類に関わる記述である．たとえば，時制の分類に関しては，テンスは発話時との関係で区分されるが，分析にあたっては学習者文法にしたがった 6 つの区分を用いると前置きした上で，論を展開している．接続詞についても，そうした説明（本論文における手続き論）がほしい．

西出氏は論文冒頭で，読み手の間で「読み」のプロセスに，個人差と共通する側面の双方があると述べている．要約文に多様性がある所以であり，その多様な要約文を分析するために，工夫をこらしている．ところが，質疑応答にあたり，「原文のマクロ構造＝要約文であり，正答は 1 つなのか？」という誤解を招く危険性の排除，招いてしまった場合の対処などへの考慮が足りなかった点は残念である．

どの点についても，「自分にとってあまりにも当然なこと」であったのか，研究者としての姿勢と目の前の調査に必要な作業との関係の説明に配慮が至らなかったのか，いずれにしても言葉足らずであった感は否めない．

以上は，本論文の博士論文としての価値を減じるものでは全くないが，今後，研究者として歩む中で注意を怠らない姿勢が望まれる．

5　結論

丁寧な手続きを経た調査，調査結果の緻密な分析，間然する所の無い構成，ドイツ語教育に生かせる結論など，見事である．言語学者としての基礎的な鍛錬が十分にできていることを示し得ている．課題・発展に述べた項目も含め，総合的に考え合わせた結果，審査委員は，本研究が着実な成果を挙げ，学問に貢献したと判断した．よって，全員一致で，博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した．